

田口 ランディ著  
『キユア』(朝日新聞社)

メスを通して体内の微弱な電位差を読み取り、こわれた細胞を最小的確に切除する手腕の若い有能な外科医が、自らもガンで余命一年と知っても、医療現場を知っている者として治療を拒み、世間からも遠退いてすべてを拒絶していたが、やがて、自分を慕って来る末期ガン患者たちを説諭することが、自分をも救済(キユア)することだと気づいたという話です。ミトコンドリア・イヴの末裔ゆえの超能力も彩りを添えて飽きさせません。私は、話そのものよりも、登場人物の会話などに見られる化学や医学の記述に惹きつけられました。例えば次のような記述、「肉体は一つの情報系だ。トランプ対応の素早さには感服する。だが、もうソフトが古い。まだ石器時代のソフトを使っている。環境の変化が速すぎて、ヴァージョンアップが追いついていない。ストレスを感じただけで血小板を増やしたりする。

## 読書案内

石器時代のストレスは猛獣との格闘。すぐに止血準備。そんなことを今でもするから血が固まって動脈硬化が起こる。生命を維持しようとする働きが、個人の意識なしで大昔の記録をもとに行われていたりするので、宗教的解釈を待つまでもなく、人は自ら生きているのではなく、生かされているというこ

司馬 遼太郎著  
『この国のかたち』  
(文藝春秋)

3年生の皆さん、卒業おめでとう。人生の門出に、司馬遼太郎氏の「この国のかたち」を紹介したい。

私は、歴史が好きである。特

に司馬氏の歴史小説に描かれている人間に魅力を感じる。「竜馬が行く」、「新史太閤記」、「国盗り物語」、「燃えよ剣」、「菜の花の沖」。登場人物それぞれの生き様に心動かされ、勇気づけられる。どうして、これだけの人物像を描けたのだろうか。その答えが「この国のかたち」にある。彼は太平洋戦争で兵役に服していた23歳の自分から離れられずにいた。

昭和20年、本土決戦に備え、彼の連隊は満州から戻って栃木県佐野に駐屯していた。町で無邪気に遊ぶ子供達を見て、自分がこの子らの将来のために死ぬるなら、多少の意味があるのではないかと思ふ。しかし、ある日その愚かしさに彼は気づく。

本土決戦となればまず死ぬのはこの子らである。終戦の放送を聞き、「なんと愚かな国に生まれたことか」と同時に「昔はそうではなかったのではないか」と彼は思ふ。

戦後、この疑問を自分自身で解き明かしたい一心で、23歳の自分へ手紙を書き送るようにして作品を作り上げていった。20

数年書き続け、ようやく当時の疑問が解け、「この国のかたち」にまとめたのだ。

日本とは、日本人とは何かなぜ愚かな戦争をする国になったのか?この国の習俗、思考や行動の基本的な型を煮詰め、様々な歴史の情景から核となっているものに迫っている。

歴史を通して、未来をどのように生きたらよいかを我々に語りかけている。これからの時代を担ってゆく若者へのメッセージである。

細野 真宏著  
『数学嫌いで「数学的思考力」が飛躍的に身に付く本!』  
(小学館)

この本の題名からも察することができるように著者は元々、数学が専門である。皆さんも彼が書いた「細野数学」といわれる大学受験用の数学参考書のシリーズを書店で見かけたり、なかには実際にこれで勉強したりしている人もいるのではなからうか。かつては数学嫌いの一人であったと自称する著者が、独

自の学習法で身に付けた「数学的思考力」を大いに活かして、日常よく目にする経済のニュースを分かり易く解説した本もシリーズで執筆している。これが経済本では日本初の「ミリオンセラー」になったことで、私は著者の名前を知り得た。

今回、案内する本を初めて見た時は、要するに数学の学習法に関するものかと思ったが、ざっと目を通せば、現在の教育を鋭く風刺した箇所もあり、つい買って読んでしまった。著者自ら「私は活字が苦手なので、昔から本は全く読まない」と言っている通り、文章の体裁は今ひとつ味気なく、まさに数学の参考書を読んでいる感がある。しかし、その内容は十分に満足のいくもので、目に耳にする情報を素早く正確に理解するノウハウについて、的確にポイントを挙げてまとめている。骨子を紹介すると、「思考の歩幅・持久力・骨太さ」を理解し、「数学的思考力」により、「情報の本質」を見抜いて、「情報の基盤」を作ればよいというものだ。もちろん、この辺りのことをしっかり

身に付けば、伝える側としても、相手に説得力のある話をする事が出来る。何かと有用なお薦めの一冊である。

# 『悲しみよこんにちは』

フランソワーズ・サガン著  
(新潮文庫)

## 『美の構成学』

三井 秀樹著  
(中公新書)

セシルは十七歳 若くて魅力的なやもめの父親と仲良く無秩序で享乐的な日々を送っている。ある夏、そんな父娘を亡き母の友人が訪ねてくる。理知的で聡明な彼女は、やがて父親の愛情を得て結婚を決意させるのだった。父の再婚はこれまでの生活の終わりを意味した。彼女の存在は無秩序だった父娘の生活を秩序だった、洗練されたものへと導いてくれる希望に思えたのだが…。ものつさと甘さとがつきまとって離れないこの見知らぬ感情に、悲しみという重々しい、立派な名をつけようか、私は迷う」という一文から始まるこの小説の悲しみとは、物語上の悲しい顛末のことでは

なく、「他人の鑄型に自分を嵌めようとしても、自分の本性がそれに背き、きしきしと軋み出す」というどうしようもない悲しみのことではなからうか？若い読み手はセシルを通して、また大人の読み手は再婚相手の女性を通して、何かを感じると思ふ。サガンの文章は、このどうしようもない悲しみを人生の甘美な味わいのように描き出す。是非、女子生徒に読んでほしい。

造形分野(美術、建築等)への進路を考えている生徒にお奨め。筑波大教授である著者が、とかく感性一辺倒に思われがちな美の世界を造形の要素・美の原理という大きな視野から、なぜ美しいのかやさしく説いてくれる。

## 『あほうづがらす』(新潮文庫)

池波 正太郎著

池波正太郎の小説を読みましたが、司馬遼太郎とはまた違った面白さがあった。その小説もさることながら、佐藤隆介の解説も的を射ていたので、要約して紹介します。

池波正太郎の人間観の根本となっているものは「所詮、人間というものは理屈ではどうにもならない、矛盾だらけの生きもの」という一種の悟りである。頭の中でいくら考えたところでどうにもならない人間のふしぎさや運命のおそろしさを一方で語りながら、また一方で、そうした人の世のしがらみや運命とどのように対決し、あるいは折り合って、生きていけばよいかを示している。

だれしも幸運の星ばかりを背負って生まれるわけではない。人はそれぞれに、種類や程度の差こそあれ、他人にはいえないコンプレックスを持っているのがあたりまえである。もう少し頭がよかつたらと思い、あと5センチ背が高かつたらと願い、

せめて十人並みの器量だつたらと思ひながら、それをどうにもできないのが人間である。そういうさまざまなコンプレックスをマイナスの方向でしか吐き出せない人間もいれば、逆に与えられたハンディキャップを自らのバネとして生きる道を切り開いていく人間もいる。

池波正太郎は、つねに人間を理論では割り切れぬふしぎな生きものとしてとらえ、不可知な運命にいつも最悪の条件を先に見てしまつ、ある意味運命論者であるが、だからといって人生を生きるに値しないなどとは決していわない。むしろ逆に、「そういう人生なればこそ、面白がつて生きればいいではないか、たつた一度しかない自分の人生なのだから」と教えている。

## 玉岡 かおる著 『お家さん』上・下(新潮社)

「お家さん」とは、神戸を拠点として大正時代の大戦景気の波に乗り、日本一の商社にのしあがつた「成金」鈴木商店の女主人・鈴木よねのことである。鈴木商店を扱った文学作品としては城山三郎の『鼠』があるが、これは大番頭の金子直吉と米騒動の際の鈴木商店本店の焼打ち事件を中心に描いたものであつた。『鼠』にも鈴木よねは登場するが、脇役に過ぎなかつた。それに對して、『お家さん』は「明治の女の典型として家を守

り、子供を育て、しかし大きな店のトップに立つても自分を律し、自分を抑えて生きた」(著者)女主人の視点で鈴木商店の盛衰を描いた作品である。そして女中のイシや、女中から「夜の神戸市長」と呼ばれる旅館の女将になつた千、よねに娘同然に育てられた珠喜など、女主人を取り巻く多くの女性たちが次々と登場し、彩りを添えている。

鈴木商店は昭和二年の金融恐慌のさなかに倒産した。鈴木よねは「鈴木商店の繁栄は、直ぐん(金子直吉)が作つて、直ぐんがぶした。…うちは、ええ夢を見せてもらっただけのことや」と語つたという。こつこつ調子で姫路生まれのよねの播州弁を、同じ播磨出身の著者が見事に表現している。

明治から昭和初期にかけての激動の時代を駆け抜けた様々な人々の生き様を、それに共感しながら、時には反発しながら楽しんでもらえればよい。四年を費やして完成させたと言つ上下二巻の長編であるが、一気に読ませてくれる傑作だと思ふ。